

里づくり

第8号 2014年2月

編集・発行/北海道農政部農村振興局農村整備課
〒060-8588 札幌市中央区北3条西6丁目

TEL 011-231-4111 / FAX 011-232-4128

http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ns/nss/2_kannri/shidouindayori.htm



CONTENTS

- **地域づくりリレーインタビュー**
株式会社北海道宝島旅行社 代表取締役 鈴木 宏一郎 さん
「住んでよし、訪れて良しの観光地域づくりで、地域を輝かせる」
- **北海道里づくりアドバイザーレポート**
上ノ国町 吉見 俊彦 さん 「地域で守ろう 豊かな自然」-人・地域・水土里輝くふるさと-
沼田町 野 道夫 さん 「地域資源を活かした里づくり」
- **実践！地域づくり** 森町森地区、日高町・新冠町里平地区、別海町別海地区、鶴居村鶴居地区
- **BOOKS**
- **トピックス**

一人に学び、地域に学び、いまできることから始めるー

住んで良し、訪れて良しの観光地域づくりで、地域を輝かせる

(株)北海道宝島旅行社

代表取締役 鈴木 宏一郎 さん

鈴木 宏一郎 (すずき こういちろう) さん

1965年 北九州市生まれ
 1988年 (株)リクルート入社
 2005年 (株)リクルートをフレックス定年退職
 2005年 (株)ヒューマン・キャピタル・マネジメント取締役就任
 2007年 (株)北海道宝島旅行社を設立、代表取締役就任
 2007年 (株)ヒューマン・キャピタル・マネジメント取締役退任
 2010年 (株)北海道宝島トラベル設立、代表取締役就任

現在、農林水産省6次産業化ボランティアプランナー、観光庁の観光地域づくりアドバイザー、青森県観光戦略策定委員等の多くの公職に就く。



北海道宝島旅行社の鈴木宏一郎さんを取材のため会社を訪問したのは、一月中旬。十名ほどのスタッフが、ひっきりなしの電話に対応をする。時には英語での応対が聞こえるグローバルな雰囲気の中、お話しを伺った。

いつも心に北海道があった

リクルート時代

生まれは北九州市、大学は東北大学へ進み、日本一周旅行に憧れた。

「オートバイで日本中を回りました。その時初上陸した北海道で、出会った人々と景色に感銘を受けて、いつか北海道に住みたいという気持ちを持ちました。」

卒業後はリクルートに就職。東京本社に勤務するが思いは強く、北海道支社へ異動する。九年間の北海道勤務で様々な地域の人達に出会う。

「その人達にお世話になった分、リクルートで培った経験を活かし、北海道の地域活性化をお手伝いしたいという気持ちがいっつもありました。」

小樽商科大学大学院で商学修士課程を修めた。イギリスやドイツに視察に行つて北海道のグリーンツーリズムは他諸国と比べても素晴らしいものがあると感じ、その支援を生業にしていきたいという思いを募らせた。

仕事は面白いが、いつまでもリクルートに居続けることはできない。退職を考へるが引き留められ、グルメ・クーポン

情報誌「ホットペッパー」の新版立ち上げを任せられる。鹿児島、北九州を年間五十往復する日々。その後、名古屋、静岡、浜松、岐阜、仙台版と手がけていった。しかし、「早く、北海道で地域活性化のお手伝いがしたい」という気持ちがあつた。その後、満を持してリクルートをフレックス定年退職した。

体験プログラムに特化した

北海道宝島旅行社の立ち上げ

二年間の起業コンサルティング企業勤務を経た後、平成十九年にリクルート時代の後輩と「北海道宝島旅行社」を設立した。

なぜ、旅行会社を興したのかの問いに「私は、旅行会社をやりたいのではなく、地域活性化のお手伝いがしたいのです。」と答えが返ってきた。

「北海道はこんなに素晴らしい所で、地域の人達も頑張っているのに、どうして地域は潤わないのか、後輩と二人で悩み色々な事業の方向性を探りました。」

悩み抜いた結果、北海道内の体験プログラムに特化した旅行会社に目を付けた。「観光で訪れたお客様がリピーターになる理由は、地域で出会った素敵な方々にまた会いたくなるから。せつかく北海道に来るのだから、本当に魅力的な地域の人達にもっと出会って欲しいです。」

長い間、観光の主流は、航空券や現地地の宿泊先、空港からの送迎、観光などを旅行会社側で組み立てるパッケージツアーが主流だった。これは団体行動となるため少人数を対象とした体験観光とは結びつかない。そこで地元の良さを広く伝えたいと思う体験観光ガイドと、もっと



各地の体験をフェイスブックでも発信

地域と観光客との架け橋となる

最近増え続けている外国人観光客の個人自由旅行者のオーダーメイドツアーの受け入れが多い。

「外国人のお客様に対しては、アウトドアな体験をしたいのか、のんびりしたいのかなどの要望を聞き、日程とプログラムをオーダーメイドで組み立てます。」

同社にプログラムを依頼する場合、北海道までの移動手段は外国人観光客自らで手配する。通常であれば旅行会社が手配するか、大手旅行会社と連携して集客をするのが一般的に思えるが、それはあえて行わない。

「北海道までの航空機手配は外国人観光客自身でも容易にできること。私たちは、北海道でお客様をお迎えして、道内の旅行をいかに楽しんでいただくかをプログラムします。私たちの会社は、送り出す観光ではなく迎え入れる観光なのです。」

観光がもたらす地域への効果について伺った。
 「地域が観光に取り組み理由は、経済効果もありますが、外の目から見た地域の

良さを地域住民が再認識することができ
るから。観光は、滞在交流型にしないと
地域への経済波及効果も生まれない。そ
して交流の機会がないため、地域の人が
愛している歴史や文化、特産物などの大
切なもの、これを地域DNAと呼んでい
ますが、お客様に地域DNAを伝えるこ
とができない。それが伝わらなければ、
観光客はリピーターにはなってくれない
し、滞在時間も伸びない。滞在交流させ
ることによって、滞在時間が延びると経
済波及効果が生まれ、地域の人が地域の
魅力を語る時間も生まれる。今以上に滞
在交流の仕組みを作り、地元の魅力を伝
えなければ本当の観光の効果は現れない
と思います。」

地域DNAを再確認し、

明確なコンセプトを打ち出す

鈴木さんは地域DNAという言葉を使
ったが、地域に住んでいる人にとつて
の地域DNAは、当たり前すぎて気付か
ないものではないか。

「これからの観光は、地域の人がそこに
住んで良しと思うことを訪れた人にお裾
分けしてあげることです。観光庁の観光
圏整備実施計画で、全国で十二カ所指定
されているうちのひとつである上富良野

町東中地区の人にお話しを伺わせていた
だきましたが、地元の人、なぜこの地
域が選ばれたのかさっぱりわからないと
言っていました。上富良野に『あぜ道よ
り道』という大変人気のあるファームレ
ストラップがあるのですが、そこを経営す
る母さん達も、毎年、東京や大阪から多
くのお客様が来るが、どうしてわざわざ
遠くから毎年来てくれるのかわからない

と言うのです。でも、わからないままに
しておくのはもったいない。お客様が感
じてくれる魅力とは何かを外部のアドバ
イザーを交えて、話し合う。その魅力と
は何かを具体的に言葉にし、その言葉を
感じられる滞在交流プログラムを作る作
業が大切だと思います。」

東中地区でも、話し合い、言葉にする
作業を行った結果、見えてきたものがあ
ったそうだ。

「東中地区は大変仲が良く団結力のある
地域です。母さん達が観光客に、どこか
ら来たんですかと気さくに話しかける。
地元の旬な野菜を活かしたおいしい料理
を食べてほしい気持ちがある地域に脈々
と続いている。十勝岳連峰の美しい景観

も、個人邸の美しいガーデンも、い
つも変わらない。東中地区を訪れる人は、
おいしい食事と気さくで温かく、変わら
ない空間に安心したいという思いで来る
のです。しかし、そこに住む人はその魅
力が当たり前すぎて気付かない。それを
具体的な言葉にして再認識する。言葉と
して具体化することによって訪れた
人をどのようにもてなすか、明確なコン
セプトを作ることができます。」



冬の八雲駅

今、一番注目している地区を伺った。
「八雲町が面白い。通過型観光のイメー

ジが強い地域ですが、歴史を掘り起こし、
訪れた人に説明できるよう、地元商店主
から高校生まで熱心に取り組んでいます。
八雲町は北海道を代表する特産物の木彫
り熊やバター飴の発祥の地でもあります。
そのことを地域の人が再認識して、眠っ
ていた木彫り熊を磨いて飾り、バター飴
の誕生から八雲町の農業の歴史を皆で学
ぼうとしている。北海道新幹線の開業に
向けて道南の注目が高まる中、八雲町の
盛り上がりに期待しています。」

外からのファンたちが

地域の子供に魅力を語ってくれる

最後に、地域づくりに携わる方たちへ
メッセージをいただいた。

「観光地域づくりは、宿泊や食事、体験、
お土産などと役割分担が明確で、地域の
皆が力を合わせるベクトルとなります。
外から来るお客様にわが地域DNAを自
慢して、喜んでもらい、その対価にお金
を落としてもらう。喜んでもらえる地域
は嬉しくなり、もつと自慢したくなる。
すると地域の景観や様々なことに気を配
り、更に地域が輝く。そして訪れた人は
地域がもつと好きになる。その外からの
ファンたちは、地域の子供達にその地域
の良さを外の目線から褒めてくれる。そ
うすると子供達も地域を見直すようにな
る。そういった正のスパイラルを作り出
すことが観光地域づくりだと思っていま
す。地域おこしに携わる方には、地域の
魅力を再認識・再編集をして、観光客を
良い意味で地域おこしに利用してくださ
い。住んで良し、訪れて良しの観光地域
づくりに積極的に取り組んでいただけれ
ばと思います。」



北海道宝島旅行社

地域を知るには、まず体験してみよう！
北海道の体験型観光が一堂に集うサイト

北海道体験.com



英語版 web
もあるよ～



ツアープランには
北海道宝島トラベル





「地域で守ろう 豊かな自然」

— 人・地域・水と土輝くふるさと —

上ノ国町 吉見 俊彦 さん



吉見 俊彦 (よしみ としひこ) さん
1954年上ノ国町生まれ
1977年函館大学商学部商学科卒業
同年5月、上ノ国土地改良区採用
現在、水土里ネット上ノ国事務局長



上ノ国町の里づくりアドバイザーとして活躍されている吉見俊彦さんに寄稿していただきました。

アドバイザー委嘱前からふるさとの自然がいかに大切なものであるかを感じていた中で、ふるさと「上ノ国」の大自然と大先輩に影響を受け、環境保全に取り組まれた契機や、若かりし日の活動から現在の取り組みまでを紹介します。

活動の原点は大先輩の講話

地域づくり活動の原点は、興味をそらされる講演を拝聴する機会を得たことが始まりでした。

その時の講師は、現在も我々と共に里づくりアドバイザーとして活躍される大先輩「野道夫(沼田町)」さんです。

講話は、ホタルで町おこしに奮闘された大変興味深いものでした。

今やホタルと言えば真っ先に「沼田町」を思い浮かべるほど素晴らしい活動を実践されています。

野さんの真摯に取り組む姿、それがやがては行政を巻き込み大きな広がりとなり、立派な観光資源に発展したお話しに感銘を受けました。

子供の頃の郷愁を今の子供たちへ

その講演を聴いた後、仕事柄様々な事業を展開する中で、ふとした疑問が湧いてきました。組合員のため機械化・労力削減・増収を目的に実施した土地改良事業では、利便性のために身近な自然を犠牲にしていることに気が付きました。

それは、ホタル観賞をするという子供達の体験学習への案内を受けたことがきっかけでした。

以前は当たり前のように夏の夜空に舞っていたホタルの姿が見られなくなっていることに驚きを感じました。

農業や水路の改修が進み、昆虫・魚類等の生態環境を阻害する原因となっていたのです。

PTAを通じた取り組み

その頃、PTA役員を務め、実年部(しいちゃん、ばあちゃん)の協力を得ながら米・野菜作りを行い、その収穫物で子供達に指導していただいた人達を慰労する場を設けていました。

核家族化が進み、三世代が生活を共にする環境が少なくなってきた中で、この慰労会を通じて子供たちとお年寄りが和やかな一時を過ごすと共に、子供たちに昔の生活体験を知ってもらいたいという実年部の要望で、廃校の教室で昔の衣食住についてのお話しを聞いた。炭焼釜づくりや、ワラ細工を教えてもらうなどの活動にも携わりました。

活動のために心掛けたこと

小学生の頃、近所に住む上級生の後を追いかけて、野山を駆け回り、虫や木の実を取り歩いたことが懐かしく思い出されます。それが、今では少子化や過疎化等の影響で、面倒を見てくれる上級生は少なくなり、野山で遊ぶ楽しさ、虫を捕る楽しさを知らない子供が増えています。

増えています。

昔のような環境を取り戻すことは容易なことではありません。しかも、協力者を得るためには、生活に余裕がなければこのような活動に協力してもならないと思いました。

今あるものを利用し、労力をかけずに収益が上がる作物の模索が始まりました。

労働時間を短縮し、短縮により生まれた時間で他の作物を導入、栽培し収益を上げるため、米の直播栽培で園芸野菜等栽培(軟弱・アスパラ)を行う取り組みに参加しました。関係者の協力を得て、人に勧めるために自らが体験して栽培することを実践しました。

自然景観



J R天野川頭首工の花壇

自然景観への配慮から、葉や実の色が鮮やかな古代米や黒米、カラー米等の栽培を行いました。黒米は収益面で

は、一番良かったものの、販売方法に問題があり、現在は栽培していません。

現在は、五月に廃線になるJR江差線沿いの「天野川頭首工」周辺に花壇を作り、四季折々の花を鑑賞してもらう取り組みを行っています。

釣り人安全対策

清掃活動や草薮等を実施し、釣り人の安全対策を行いました。

上ノ国町の中央を流れる清流、天の川は「鮎釣り」として大変有名な河川で、「湯ノ代鮎愛好会組合」や「NPO 河川環境基金」と連携し、魚道の土砂排除作業や周辺の清掃作業、通水量の調整等に便宜を図りながら、魚類等の自然ふ化を図っています。行政には魚道設置に向けた要望を行い、近年ではその効果が現れています。

食育活動

町・学校・PTAと連携して、上ノ国町の特産である「絹サヤエンドウ」の移植・収穫作業・調理・試食体験を児童に行い、食育活動にも携わりました。

事業実施当初、雑草処理作業には薬剤散布を行っていましたが、自然を守るという観点や作物への影響を考慮し、草薮作業へ変更し、その割合は高くなっています。

自然を守る活動

農地・水・環境保全向上対策事業を実施する「宮越地区水土里を保全する会」の活動に対する提言や助言を行い

ながら、地域の自然を守る活動を行いました。

自然を守ることは、何も手を加えないことが一番と思っておりますが、住民の安全を考え、獣から身を守るために河畔林を伐採したり、草薮作業等の充実を図らなければなりません。簡単に自然を守るといっても、時と場合によって使い分けをしなければならぬ難しさを感じます。



宮越地区水土里を保全する会 植樹参加者

「ゆい」制度の活用

大規模農業を無計画に推し進めることは、ますます地域の過疎化が進み、集落衰退を招きかねません。都会で希薄となった相互扶助の精神は、田舎ではまだ十分に残っています。農作業体系も全ての人が大型機械類を持っている訳ではなく、狭小な面積しか持たない農家は「ゆい」制度を活用し、大規

模農業ではできないような作物を栽培し収益を上げています。手間暇をかけなければできないような作物でも、十分に収益を上げる糧を生み出します。

高齢者も働ける限り外に出て農作業を行うことで交流の機会が増え、何気ない会話が「ボケ防止」の予防になり、近隣住民は一人暮らしのお年寄りの安否確認につながっています。高齢者に声を掛けることも、これからは必要なことだと思っています。力仕事はできなくても、軽作業ならできるという人にも活動の協力をお願いして、人と人とのつながりを大切にしながら、少しでも地域の中に自然を残しておけるように今後も活動して行きたいと思っています。

「若者が安心して定住できる環境づくり」を目指す

ある程度の農作業は子供の頃から体験し、その辛さも実感しています。仕事柄、色々な作物の栽培を見てきた中で、機械化が予想以上に進んでいます。機械化は便利な反面、それに携わる人の減少に拍車がかかっていることを実感します。

そうした中で、「自然環境を守る」ということは、「地域の協力と人づくり」が一番重要になってくると考えています。若者が安心して定住できる環境づくりは、言い換えれば「安定した生活ができる地域づくり」が育たなければならぬと痛切に感じています。

今と比べて何もない中で、創意工夫を重ね生活してきた先人の知恵を拝借しながら、「人・地域・水土里輝くふるさと」を目指しながら、活動していきたいと思えます。

BOOKS



今回は、北海道中山間ふるさと・水と土保全対策委員会の小西由稀委員にご紹介いただきました。

■地域をプロデュースする仕事

著者：玉沖 仁美 発行：英治出版

著者は、地域プロデューサーとして活躍する、株式会社 紡（つむぎ）の代表取締役で、島根県海士町のご当地カレーとしてヒットした「さざえカレー」のプロジェクトに携わる。本書では、地域プロジェクトの成功例を紹介するだけでなく、効果的に結果を出す方法を記す。



「地域資源を活かした里づくり」



野 道夫 (の みちお) さん
平成4年、沼田町土地改良区を退職後、平成7年から19年まで、沼田町議会の議員を務める。現在は、沼田町ホテル研究会会長、沼田町老人クラブ連合会会長など、精力的に地域活動に従事している。

沼田町とえば「ほたるの里」、ホテルと言えば野さん、と言われるほど野指導員のホテル保全への活動は有名です。「里づくり」第一号に掲載した、喜茂別町での取り組みでは、講師としてのご活躍を紹介しています。そちらも併せてご覧ください。

農村環境の向上活動

水路周辺にハーブを植栽

昨年六月に沼田町土地改良区職員やOBのほか、最高齢は九十一歳の沼田長生クラブの会員二十名も駆けつけ、沼田厚生病院の裏手にある沼田町土地改良

沼田町 野 道夫 さん

区(通称、水士里ネットぬまた)が管理する沼田第二幹線水路の周辺にハーブやマリーゴールド約二千株を定植しました。作業後、参加者たちは充実した表情で花を眺めていました。



この取り組みは、水利施設周辺の安全や景観を維持するため、国営造成施設管理体整備促進事業の一環として、五年前から行っています。きれいに整備され

たことにより、買い物や散歩で利用する人が増えたことが実感でき、今後も水路を管理する「水士里ネットぬまた」と協議しながら続けていきたいです。

交通安全の呼びかけ



春、夏、秋の交通安全運動期間の最終日に、交通安全をドライバーに呼びかける「旗の波運動」が沼田小学校前で実施され、沼田警察署員、同町交通安全協会役員のほか、町内の保育園児四十名と老人クラブ連合会から四十五名が参加しました。

沼田警察署員が行き交う車を止めて、参加者たちが啓発チラシや夜光反射材の入った袋をドライバーに手渡しまし

た。園児たちも旗を振りながら、「安全に沼田町を通過してください。」と声を掛けました。



地域に住む子供や高齢者は大事な「地域資源」であり、こういった子供や高齢者の活動も、地域の資源を活かした里づくりの一環と考えています。

情報誌「里づくり」バックナンバーはインターネットからご覧になります。
「里づくり 北海道」で検索！

里づくり 北海道

検索



☆☆ 実践！地域づくり ☆☆

今年度からふる水事業で活動支援地域として奮闘中の地域をご紹介します。

日高町・新冠町 里平地区



地域食材による加工品、調理法の開発及び発信から、地区内外との交流を図り地区の活性化や農業集落としての持続性を確立することを目的とし、食を核とする活動団体「食楽カモミールの会」を立ち上げました。

11月21～22日には、北大の山本講師を招き、ワークショップを開催しました。地域特産品を活かしたメニューづくりを目指します！

森町 森地区



町内の女性農業者と女性漁業者の有志が「地産地消の推進」「食育活動」「地域の活性化」を目指して「森かせる会」を結成しました。森のイカめしに次ぐメニューを開発し、森町の魅力をPRするために奮闘中！ちなみに会の名前の由来である「かせる」とは、道南地方の言葉で「食べてもてなす」こと。

12月5日には、貫田シェフを招いて「地域に普及させたい新たな料理の講習会」を開催しました。

鶴居村 鶴居地区



豊かな自然や美しい農村景観を有る鶴居地区では、村民自らが鶴居の自然の豊かさや地域資源の魅力を確認し、この恩恵を生かしゆったりと楽しく豊かな時間を過ごすという、鶴居ならではのライフスタイル「鶴居型スローライフ」を村民に浸透させることを目指します。全村的な活性化につなげるために食や景観、人材づくりなどに取り組み、また、相互間連携による層の厚い活動を行います。

別海町 別海地区



これまでは、酪農と漁業がそれぞれの特性を活かし一次産業を行ってきましたが、これからは、お互いの産業の魅力を発掘して、お互いがその価値を認め合い、連携を進めていく取り組みを目指します。

家庭料理や地域の魅力など、酪農家・漁業者ならではの発想を合わせて、互いに交流を深め、新たな別海の魅力を発掘します。

11月22日には武蔵女子短大の松木准教授を招き、ディスカッションを行いました。

トピックス

◇地域づくり研修会を開催しました

平成25年9月24日(火)に京王プラザホテル札幌において、平成25年度地域づくり研修会を開催しました。講演には、広島県庄原市在住で「逆手塾」会長、過疎を魅力として発信し続ける和田芳治さん、北海道宝島旅行社の代表取締役社長であり、北海道の食・農・観光の活性化にご活躍されている鈴木宏一郎さんをお招きし、ご講演をいただきました。

和田さんには、自ら字を彫ったカボチャと動物を模った木製置物をお持ちいただき、身の回りに溢れるありきたりのものが見方ひとつで宝物になるという考え方や、自らのまちづくり実践体験をお話いただきました。

鈴木さんからは、ご自身が感じた北海道の魅力、いかに道外・国外からの旅行者に深く北海道の魅力を伝え、北海道のファンになってもらうか、などのご講演をいただきました。



◇現地研修を行いました

平成25年11月7日(木)から8日(金)までの2日間、当別町、栗山町、長沼町を訪れました。

当別町では、田園文化創造協議会の辻野副会長から当別町における協議会の廃校利活用への取り組みについてご紹介いただきました。栗山町では、ハサンベツ里山づくり20年計画実行委員会の高橋事務局長から現地を視察しながら説明を受けました。長沼町では、メノビレッジ長沼のエップ代表から団体の取り組みについて写真スライドと共に説明を受けました。

また、雨煙別学校に宿泊し、研修を行うほか、夜は懇親会を開催しました。参加者は活発に情報交換をし、親睦をより一層深めていました。

◇指導員会を開催しました

平成26年1月24日(金)にセンチュリーロイヤルホテルにおいて、平成25年度指導員会を開催しました。

ふる水地域支援活動地域から、興部地区の「食を考える協議会」会長の大黒敦子さん、同地域にアドバイザーとして携わる北海道大学の小林国之先生から、映像を交えての活動紹介や活動の特徴、課題などについてお話いただきました。

また、全国研修会に参加した宮崎渉指導員、田中いずみ指導員、田中弘子指導員、水沼和子指導員からは、受講内容についての報告がされました。



おしらせ

北海道ふるさと・水と土指導員ブロック会議を開催します。

北海道ふるさと・水と土指導員の研修は、平成22年度に策定した5ヶ年による事業実施計画に基づき行っており、平成27年度から新たな事業実施計画を策定します。

指導員の皆様から意見を伺い、新しい計画をより良いものとするため、道央、道南、道北、道東の4ブロックにおいて、ブロック会議を開催します。

開催の際にはご案内をさせていただきますので、ご出席をお願いします。

道北ブロック 平成25年12月12日(木) 開催済
道南ブロック 平成26年2月18日(火) 開催予定
道央ブロック 平成26年4月 開催予定
道東ブロック 平成26年5月 開催予定

おはなし
きかせてね♪

